

認知症ケアの症状と経過について

認知症の進行により変化していく症状や行動によって、在宅生活を送るために必要となる支援やサービスは異なります。認知症の症状は、原因となる疾患や身体状況などにより個人差があるため、必ずしもこの通りになるわけではありませんが、大まかな目安として参考にしてください。

標準的な流れ 認知症の人の様子の変化と悩みごとに対するサービス一覧表

 本人の様子	軽度認知障害 (MCI) ～まだ認知症ではない時期～	認知症：軽度の時期	認知症：中等度の時期	認知症：重度の時期	
	もの忘れがあるが、日常生活の活動は正常で支障がない	もの忘れが目立ち始めるが、日常生活はほぼ自立	日常生活に誰かの見守りや手助けが必要となってくる	身の回りのこと全般に、常に介護が必要な状態	
	●もの忘れの自覚がある ●よく知っている物の名前が出てきづらい 元気なうちからしておくこと ・定期的に健康診断を受け、かかりつけ医をもつ ・認知症になった時に備えて、財産管理や自分の介護、終末期の希望について考え、周りの人に意向を伝えておく	●同じ話や質問を繰り返す ●話を取繕う ●約束したことを忘れる ●趣味、日課への無関心 ●探し物が多くなる ●物を盗られたという ●小銭で支払いができない ●電化製品の操作に戸惑う ●料理の味付けがおかしくなる ●不安、いらいら、あせり、意欲低下、自信喪失	●家事の手順が分からなくなる（買い物、料理の段取り等） ●季節にあった衣類を選べない ●道に迷うことがでてくる ●言葉の意味が分からなくなる ●着替えや入浴を嫌がる	●一人で食事ができない ●一人で着替えができない ●入浴ができない ●尿意・便意を訴えられない（排泄の失敗が増える） ●言葉が減り、表情が乏しくなる ●飲食物をうまく飲みこめず、口から食事がとりにくくなる ●歩行ができなくなる	
記憶		数分前の出来事を忘れる	いつ、どこで、何をしたか忘れる	昔の記憶の中で生きる	
時間・場所・人物		時間や日にちが分からなくなる	昼か夜か、季節が分からなくなる。どこにいるか分からない	家族の区別がつかない。自宅のトイレが分からない。	
家族の気持ち	年齢のせいだろう。言えはできるはず。とまどい。否定。他の家族にすら打ち明けられずに悩む。		他人の前ではしっかりするが、身近な人には症状が強くなる。相手のペースに振り回され、疲れ切ってしまう。一番大変な時期	怒ったり、イライラしても何もメリットはないと思いはじめ割り切るようになる時期	人生の最期をどう迎えるか考え、受容する時期
家族や介護者の対応ポイント	●認知症を身近な病気として関心をもつ ●認知症を予防する生活改善や、趣味など新たな交流や活動をすすめる ●本人の役割が継続できるように声かけをする ●高血圧や糖尿病などの生活習慣病を管理する	●認知症に関する医療や介護、接し方について学ぶ ●近親者には、本人の状況を伝えておく ●気になることは、かかりつけ医や地域包括支援センターに相談する ●介護サービスを利用して、介護負担を軽くする ●今後を見通し、介護や金銭管理などについて考えておく	●人生の最終段階において希望する医療・介護などについて本人の意向を聞いておく ●本人ができることを役割としてやってもらう ●ミスや失敗を責めず、本人の不安を和らげる ●本人の興味をひく活動をすすめる	●設備の整った施設などへの住み替えを考える ●スキンシップなどコミュニケーションを工夫する ●終末期（看取り）に備える 	
認知症予防・進行を遅らせたい／地域の方とつながる・交流したい／自分のできることを活かした活動をしたい	★一般介護予防事業（貯筋クラブ、操体教室、膝痛・腰痛予防教室、水中トレーニング教室、筋力向上トレーニング教室）、各地区公民館活動 趣味・サークル活動、生涯学習プラザ講座、老人福祉センターサークル、老人クラブ活動、シルバー人材センター、地域のボランティア活動 ★介護予防・生活支援サービス事業（通所型サービス：訪問型サービス）				
相談したい／本人・家族の悩みを聞いてほしい	北谷町地域包括支援センター 認知症対応型グループホーム（上勢頭、結の郷、ちゃたん、謝苅） かかりつけ医				